

父母の出生体重と子供の出生体重の相関について

著者	田尻下 怜子, 瀧本 秀美, 松原 舞, 金子 均, 久保田 俊郎
雑誌名	DOHaD研究
巻	3
号	1
ページ	53-53
発行年	2014
URL	http://hdl.handle.net/10271/2864

P-30 父母の出生体重と子供の出生体重の相関について

○田尻下 怜子^{1, 2}、瀧本 秀美³、松原 舞²、金子 均²、久保田 俊郎¹

¹東京医科歯科大学・生殖機能協同学、²日産厚生会玉川病院・産婦人科、³国立健康・栄養研究所

【目的】 出生体重が小さいことは成人後の心血管性疾患や糖尿病のリスクとなること、また出生体重が過大なことは肥満や癌のリスクとなること、疫学研究より報告されている。母の妊娠前 BMI や妊娠中の体重増加量が児の出生体重と関連することは知られているが、このほかの要因として、父母の出生体重や父の BMI が児の出生体重に与える影響を検討した。

【方法】 都内の某病院で妊婦健診を受ける妊婦を対象に、本人と夫の出生体重を 2000g 未満(1), 2000-2499g(2), 2500-2999g(3), 3000-3499g(4), 3500-3999g(5), 4000g 以上(6) の 6 群に分けて聞き取り調査をした。また、夫の現在の体格についても調査した。これらのデータと妊娠前の体格および妊娠中の体重増加量および分娩時の年齢、分娩週数について、児の出生体重との相関を検討した。夫の出生体重が不明であった 8 名、妊娠糖尿病あるいは妊娠高血圧症候群を合併した 32 名を除外し、379 名のデータを解析した。統計学的解析は $p < 0.05$ を有意とした。

【成績】 母の平均分娩時年齢 33.4 歳、平均妊娠前 BMI 20.0kg/m²、初産割合 47%、帝王切開割合 15%、平均分娩週数 39.4 週、平均の妊娠中の体重増加量は 10.5kg、男児割合 52% であった。児の平均出生体重は 3070g であった。児の出生体重を父母と同様に 6 群にあてはめると平均が 3.64 であり、父 (平均 3.97) および母 (同 3.79) と比べて有意に小さかった。児の出生体重と有意な相関関係を認めたものとして、分娩週数 (相関係数 $r=0.453$)、母の妊娠前 BMI ($r=0.121$)、妊娠中の体重増加量 ($r=0.283$)、父の出生体重 ($r=0.211$)、母の出生体重 ($r=0.213$) であった。母の分娩時年齢や父の BMI は相関関係を認めなかった。児の出生体重を従属変数、母の妊娠前 BMI と妊娠中の体重増加量および父母の出生体重を独立変数として、分娩週数と児の性別で調整した重回帰分析を行ったところ、調整済み R² 乗値 : 0.318、標準偏回帰係数は母の妊娠前 BMI : 0.085、妊娠中の体重増加量 : 0.191、父の出生体重 : 0.191、母の出生体重 : 0.176 であった。

【考察】 父母の出生体重は児の出生体重と正の相関を認め、妊娠中の体重増加量とほぼ同程度の相関の強さであった。